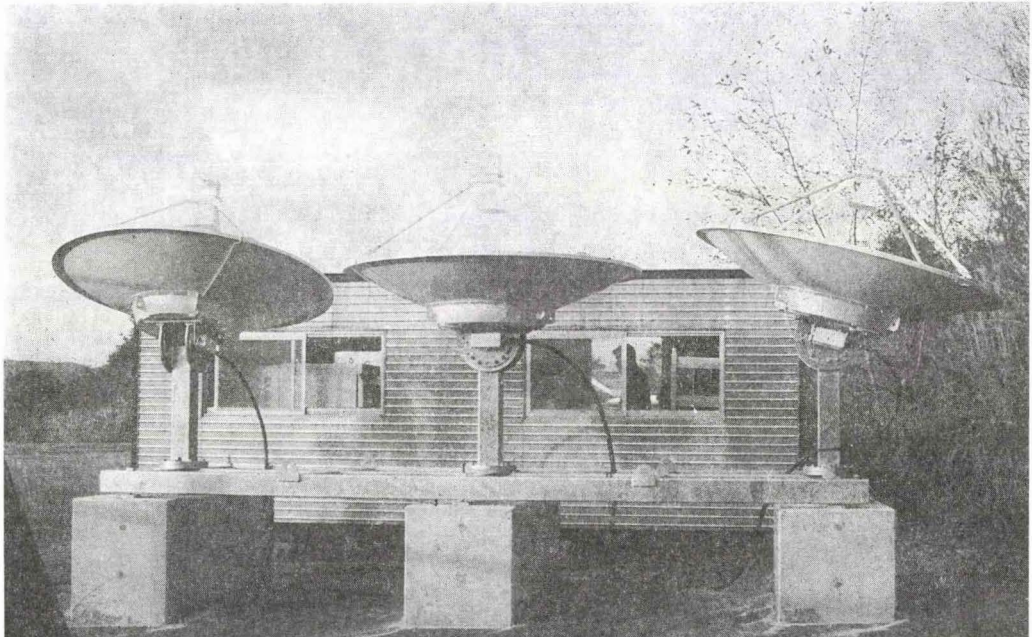


京大広報

No. 433

京都大学広報委員会



境界層レーダーアンテナ全景 一関連記事本文 352 ページ

目次

<大学の動き>

- 京都大学春秋講義(秋季講座)の開講…………… 350
- 京都大学市民講座の開講…………… 351
- 部局長の交替等…………… 351

<部局の動き>

- 医療技術短期大学部説明会…………… 351
- 農学部附属演習林資料館の開館…………… 352
- 超高層電波研究センターが
「境界層レーダー」を完成…………… 352

一公開講座一

- 工学部「自然と工学の調和」…………… 353
- 人文科学研究所「越境する人びと」…………… 354
- 農学部「農業簿記・農業経営講習会」…………… 354
- 医療技術短期大学部
「健康科学公開講座—こどもと生きる—」…………… 354
- 理学部「高等学校教育関係者のための

現代数学展望…………… 355

霊長類研究所「霊長類の進化」…………… 355

農学部附属演習林「芦生の自然と森林の利用
—演習林への招待—」…………… 355

数理解析研究所「数学入門」…………… 356

防災研究所「都市の防災」…………… 356

<紹介>

生態学研究センター…………… 357

計報…………… 358

日誌…………… 360

<随想>

「上寿」(100歳)を迎えた地理学者
名誉教授 浮田 典良…………… 361

<コラム>

理想の大学
教養部教授 高橋 三郎…………… 362

＜大学の動き＞

京都大学春秋講義（秋季講座）の開講

本学では、財団法人京都大学後援会の協力により、下記のとおり「京都大学春秋講義(秋季講座)」を開講する。

本学教職員並びに学生については、各講義とも特別受講枠（無料）30名を設けているので、受講希望者は所属部局の事務担当掛へ申し込むこと。

記

☆月曜講義（5回シリーズ）メインテーマ『医療を考える視点』

開 講 日	講 師	テ ー マ
10月12日	医学部教授 糸川嘉則	生命倫理と移植医療
10月19日	工学部教授 赤松映明	医工学治療の現状
10月26日	医療技術短期大学部助教授 石井誠士	ホモ・クラーンス（いやす人） —医療の原点を見すえて—
11月2日	法学研究科教授 前田達明	医療と民事責任
11月9日	経済学部教授 西村周三	先端医療技術の経済学
定 員 120名 受 講 料 6,000円（全講義を通しての受講料）		

☆水曜講義

開 講 日	講 師	テ ー マ
10月14日	数理解析研究所助教授 楠岡成雄	確率・統計の基礎をめぐって
10月21日	文学部教授 内井惣七	ダーウィンの光と影
10月28日	経済学部教授 八木紀一郎	ウィーンの経済学者—カール・メンガー—
11月4日	工学部教授 吉川和広	都市と自然の共生 —大阪ベイエリアを例にとって—
11月11日	農学部教授 熊谷英彦	微生物とそのはたらき
定 員 各講義 120名 受 講 料 各講義 1,200円		

○会 場 法経第二教室

○時 間 午後6時30分～8時30分

○申込締切日 9月30日（水）

○申込方法

① 月曜講義、水曜講義の別々に往復はがきで下記の申込先へ申し込むこと。申込はがきには、住所・氏名・電話番号を記入すること。なお、水曜講義の場合は受講希望日を必ず記入すること。（返信はがきにも住所・氏名を記入すること。）

② 受講料は、受講決定通知を受領後、指定の口座へ振り込むこと。支払後の受講料は返金しない。

○受講資格は問わない。

○申込み・問い合わせ先 庶務部研究協力課研究協力掛（内線2041, 2043）

京都大学市民講座の開講

本学では、来る10月24日、31日、11月7日の各土曜日に広く一般市民を対象とする「京都大学市民講座」を開講する。

本講座は、財団法人京大会館楽友会の協力の下に、昭和54年以来毎年開かれているもので、今年度は、「かたち」を共通テーマに、総合大学の特色を生かして学問の諸領域にわたる議義が行われる。

○受講定員 400名

○受講料 2,000円（全講義を通しての受講料）

- 申込方法
- ① 往復はがきに住所・氏名・年齢・職業・電話番号を記入（返信はがきにも住所・氏名を記入）の上、9月30日（水）までに下記の申込み先へ申し込むこと。
 - ② 受講料は、受講決定通知を受領後、指定の口座へ振り込むこと。支払後の受講料は返金しない。
 - ③ なお、本講座を本学教職員並びに学生にも広く開放するため、50名の特別受講枠（無料）を設けているので、受講希望者は所属部局の事務担当掛へ申し込むこと。

○会場 法経第四教室

○受講資格は問わない。

○申込み・問合わせ先 庶務部研究協力課研究協力掛（内線2041, 2043）

講義日程

共通テーマ —かたち—

開講日	テーマ	講師
第1日 10月24日（土） 13:00~16:40	開講のあいさつ	総 長 井村裕夫
	形態と精神—外科学の挑戦—	医学部教授 一色信彦
	スポーツ —そのこころとかたち—	総合人間学部助教授 小田伸午
第2日 10月31日（土） 13:00~16:30	空似の資本主義 —日本, アメリカ, ヨーロッパ—	経済学部教授 渡邊 尚
	遺伝子のかたちとはたらき	化学研究所教授 金久 實
第3日 11月7日（土） 13:00~16:40	神々のかたち —民衆ヒンドゥー教の世界—	人文科学研究助教授 田中雅一
	都市と造形	工学部教授 川崎 清
	閉講のあいさつ	教育学部長 岡田渥美

部局長の交替等

学生部長

岩井 保学生部長の後任として、万波通彦工学部教授（量子物性学講座担当）が7月16日任命された。任期は平成5年7月15日までである。

＜部局の動き＞

医療技術短期大学部説明会

医療技術短期大学部では、7月21日（火）午後1時30分より5時まで、本短期大学部についての説明会を開催した。

説明会には高校生287名、高校進路指導教諭13名の参加者があった。

説明会では、まず大講堂において、参加者全員に本短期大学部の特色、入試概要、各学科の教育内容を、資料及びスライドを用いて説明した。次に学内施設見学として、6グループに分けて、約1時間学内見学を実施した。最後に、各学科ごとに個人相談を行い、参加者と教官との懇談の機会を設けた。また、学生生活や入試に関する一般的な相談にも応じた。

参加者の95.7%がアンケート調査に応じ、その内の94.8%よりこの説明会が参考になったとの回答を得た。

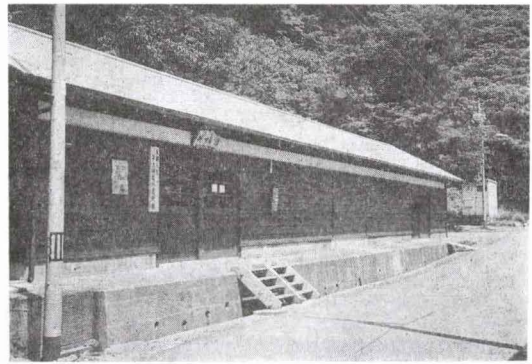
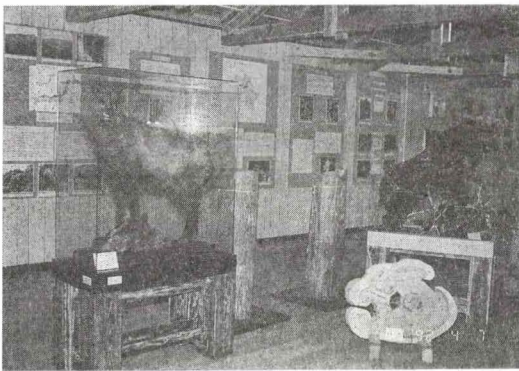
（医療技術短期大学部）

農学部附属演習林 芦生演習林資料館の開館

芦生演習林は、大正10年に開設以来70年余りが経過し、その間に学生への森林教育、教官の研究の場としての利用とあわせて木材供給の経済的役割を果たしてきた。

由良川上流の山奥にあるこの演習林は、開設当初電話はもちろんのこと電灯もなく、一般自動車道の終点から8kmほど山道を歩いて入林する状況であった。その後、車道軌道を開設し、自家発電装置を設置し、製炭事業、椎茸生産、木材生産並びに造林事業などを行ってきた。

近年、森林のもつ公益的機能、とくに環境保全機能が重要視されるようになり、大学の管理する森林を市民と森林をつなぐ案内の場として役立て



る必要が生じている。

そこで、芦生演習林では、演習林の歴史の紹介、地形、地質などの自然条件とそこに成立する森林の特徴、森林内に棲む動物、森林内に分布する植物などをパネル写真等によって展示し、さらに演習林の林業としての問題点等を解説するため、下記のとおり6月から資料館を開館した。

訪問者が芦生の自然、森林について、より理解を深められることを期待している。

記

名 称	オノジヤ 斧蛇館(京都大学芦生演習林資料館)
場 所	京都府北桑田郡美山町芦生 京都大学芦生演習林構内 (TEL. 07717-7-0321)
開館時間	平日 9:00~11:30 13:00~16:30 (農学部附属演習林)

超高層電波研究センターが 「境界層レーダー」を完成

超高層電波研究センターは平成2~3年度にかけて「境界層レーダー」を開発してきたが、この程滋賀県甲賀郡信楽町の当センター信楽MU観測所で観測を本格的に始めた。

地球をとりまく大部分の大気の運動は、地表面あるいは海表面との摩擦に直接は束縛されない。そのような摩擦が直接関与するのは、地上から高度1~2km程度の「大気境界層」と呼ばれる領域

に限られる。人間活動に最も関係の深いこの領域の運動を詳細に調べることは近年社会的にも関心の高い地球環境問題を解明する上でも非常に重要である。現在、大気境界層における大気運動の主要な観測方法はバルーンや鉄塔を用いた直接観測である。これらの方法は気温や湿度を測定できるという点で大変重要であるが、大気運動の測定方法として考えるとそれぞれ欠点がある。まずバルーンを用いた観測では時間分解能に限界があり、しかも水平風が測定できるのみで鉛直流を測定することはできない。また、鉄塔による観測では高

度100~200 mが限界であり、細かな風速変動を議論する場合には鉄塔自身による風速の変化も問題となる。

一方、VHF帯の大型レーダーを用いて大気乱流からの散乱エコーを検出し、ドップラー効果の解析から鉛直流を含む三次元的な大気運動を連続観測する技術はほぼ確立している。当センターでは、1984年以来信楽MU観測所においてMUレーダーを用いて、中層大気・超高層大気における風速変動や大気波動に関する数々の成果を収めてきたが、近年は例えば梅雨前線や台風内部の三次元風速場など対流圏内の気象現象の観測にも積極的に取り組んでいる。しかしながら、MUレーダーのような大型レーダーは一般に送信電力が大きいため送信・受信の切り替えに時間がかかり、レーダーに極めて近い大気境界層の観測ができない。そこで、大型レーダーの原理を使って大気境界層を観測することを目的とした境界層レーダーの開発を行ったわけである。

表紙写真に境界層レーダーの外観を示す。境界層レーダーの送信周波数はUHF帯1357.5MHz、ピーク送信出力は1kW、距離分解能は100mで

あり、平均的な大気の状態で地上数百mから高度2~3km程度までの水平風及び鉛直流を約1分ごとに連続観測可能である。本レーダーのアンテナ部は同一平面上にない異なる三方向に向けた直径2mのパラボラアンテナ3台から成り、これらは3台の各々独立した送信ハイパワーアンプを備えている。また信号処理装置としてUNIXワークステーションを使用しており、3台のアンプの低電力段における高速切替え等システム全体の制御を行うとともにリアルタイムで受信信号から風速の計算などを行っている。なお本レーダーは、全システムをトラック1台に積載できる可搬性、80m/sを超える強風下でも観測できる耐風速性など、多くの実用的利点を兼ね備えている。

境界層レーダーは5月下旬から連続観測を続けており、大気境界層の三次元運動が初めて様々な気象状況に対して捉えられている。近い将来本レーダーが境界層力学の解明や下層大気的环境監視に少なからぬ役割を果たすことが期待されている。

(超高層電波研究センター)

—公開講座—

工学部「自然と工学の調和」

工学部では、第12回公開講座を6月13日から7月4日までの間、毎週土曜日の午後1時30分から4時30分まで本学部大会議室において開催した。受講者は122名であった。

近年、人口の増加と活発な産業活動により、廃棄物の量が地球の許容量を超え、生物の存在を脅かすようになってきた。そこで昨年に引き続いて「自然と工学の調和」をメインテーマとし、エネルギー問題や環境保全にどのような努力がなされているか、また、地球をとりまく土や大気についてどこまでわかっているかをやさしく解説した。

なお、講義題目・講師は次のとおりであった。

化学力発電 伊藤 靖彦
地球環境時代のエネルギー

橋本 健治

溶けた鉄のセンサー 岩瀬 正則

エンジン内の流れを探る 嶋本 譲

地球環境サイクルの保全と管理

平岡 正勝

土の謎

柴田 徹

都市の気候変化と人間生活

中村 泰人

電波で探る地球大気之谜 深尾 昌一郎

(工学部)

人文科学研究所 「越境する人びと」

人文科学研究所では、夏期公開講座を7月10日及び11日の2日間、午後1時30分より5時まで本研究所本館大会議室において開催した。

1949年以来43回目を迎えた本年の講座は、「越境する人びと」を共通テーマとし、連日100名を超える受講者があった。講義題目・講師は次のとおりであった。

群衆が動くとき—フランス革命祭典への道—

阪上 孝

紫禁城のドルゴン 谷井 陽子

王道楽土を行く—「満洲国」往還—

山室 信一

中国の近代化と越境現象 森 時彦

漂流する小説 齋藤 希史

シンポジウム { パネラー 全講演者
司 会 横山 俊夫

(人文科学研究所)

農学部「農業簿記・農業経営講習会」

農学部附属農業簿記研究施設では、恒例の夏期公開講座「農業簿記・農業経営講習会」を、7月11日から16日までの6日間、午前9時から午後5時まで農学部講義室において開催した。

本講習会は本年度で56回目を数える伝統的講習会であって、日頃、農村及び農家の経営指導に従事する人達に研修の機会を提供するものである。今年も、農業改良普及員、農業協同組合関係職員、農林行政関係職員、高校教員、その他団体職員など、全国各地から94名が参加して行われた。

講義科目及び講師は次のとおりであった。

自立家族経営の発展・合理化のための「農業経済簿記」：原理と実務

稲本志良・小田滋晃・桂 利夫

企業の経営の発展・合理化のための「農業経営複式簿記」：原理と実務

稲本志良・小田滋晃

農業経営・地域革新のための農業投資および資金の計画・管理・分析

亀谷 昶・辻井 博

地域農業および農業経営の分析・診断・計画

藤谷築次・武部 隆・新山陽子・吉野 章

(農学部)

医療技術短期大学部

「健康科学公開講座

—こどもと生きる—

医療技術短期大学部は、一般市民を対象に第5回健康科学公開講座を6月27日から7月18日までの毎週土曜日午後1時30分から午後5時まで同短期大学部講義室において開催した。

本年度は「こどもと生きる」をテーマに、子供をとりまく生活環境・社会環境をはじめ、現代の子供にみられるからだ・こころの諸問題を取り上げ、下記の題目についてそれぞれの講師が専門分野の立場から講義した。

講座は、井村裕夫学長の今回のテーマの重要性を強調した開講のことばに始まった。毎回の講義では活発な質疑応答がなされ、最終回の講義のあと上羽康夫部長の公開講座のまとめと謝辞で閉講した。

今回の公開講座の出席者は102名であった。

社会的に育つこと・育てること 広瀬 卓爾
望まれて生まれて

—家族計画の落とし穴— 菅沼美奈子
母と子のゆたかな出会い 三浦 昌子



胎児と健康 城戸 國利
 子育てはどう変わったか—20年前との比較— 近田 敬子
 たくましく育つ心とからだ 小西 紀一
 学童期のこころの悩み 加藤 寿宏
 アレルギーを考える 菅 佐和子
 真弓 光文
 (医療技術短期大学部)

理 学 部

「高等学校教育関係者のための 現代数学展望」

理学部数学教室では、7月23日から29日までの日曜日を除く6日間、午後1時から午後5時10分まで上記の公開講座を本教室講義室において開催した。数学の発展が数学教育にも大きな影響を与えていることに鑑み、この公開講座は、主として高等学校の数学教育関係者を対象に、いくつかの話題を選び、数学の最近の発展についての展望を与えることを目的としている。

14年目の今年は、各地から43名の受講者があった。

講義題目と講師は次のとおりであった。

球面と複素構造	藤木 明
数値線型代数	磯 裕介
写像度	西田 吾郎
有限体上の数学	上野 健爾

(理学部)

靈 類 研 究 所

「靈長類の進化」

靈長類研究所では、8月4日・5日の両日において、午前10時から午後5時まで愛知県犬山市の本研究所会議室において公開講座を開催した。今年第8回目である。

参加者は、中・高校教員が圧倒的に多いもの

の、会社員、主婦、学生と幅広い。例年どおり大多数は東海地域在住者であるが、近畿や遠くは九州からの参加者もあった(参加者68名)。今回は、靈長類の特徴を生化学、遺伝学、社会生態学、心理学の観点から取り上げ、ヒトとの共通点・相違点を明らかにした。また、受講者全員が実習を受け、自分自身で研究の現状を少しでも理解できるよう配慮した。

講義・実習題目と講師は以下のとおりである。

総合司会	岩本 光雄
酵素化学と遺伝子工学	景山 節
遺伝学からみたヒヒ類の系統と進化	庄武 孝義
群れと地域コミュニティ	森 明雄
靈長類の知的行動	友永 雅己
骨学実習	岩本 光雄
実験動物実習	松林 清明
	後藤 俊二

(靈長類研究所)

農学部附属演習林

「芦生の自然と森林の利用

—演習林への招待—

農学部附属演習林では、昨年に引き続き8月5日(水)から7日(金)までの3日間、芦生演習林(京都府北桑田郡美山町芦生)において公開講座「芦生の自然と森林の利用-演習林への招待-」を開催した。

森林が木材資源供給の役割と公益的機能を保有していることに鑑み、大学の管理する森林において、一般市民が森林の役割を認識し、理解を深める一助として今回2回目の講座を実施した。

講座のスケジュールは第1日と第3日を講義にあて、第2日を主に森林内での実習とした。48名が受講した。

それぞれのテーマ及び担当者は次のとおりであった。

芦生の気象と地形	中島 皇
芦生の森林と樹木	大島 誠一

森林昆虫のはなし

—害虫とは—

古野 東洲

樹木の識別

山中 典和

天然林内での実習

川那辺三郎

ほか8名の教官

芦生演習林の利用と変遷

枚田 邦宏

森林の伐採、搬出の

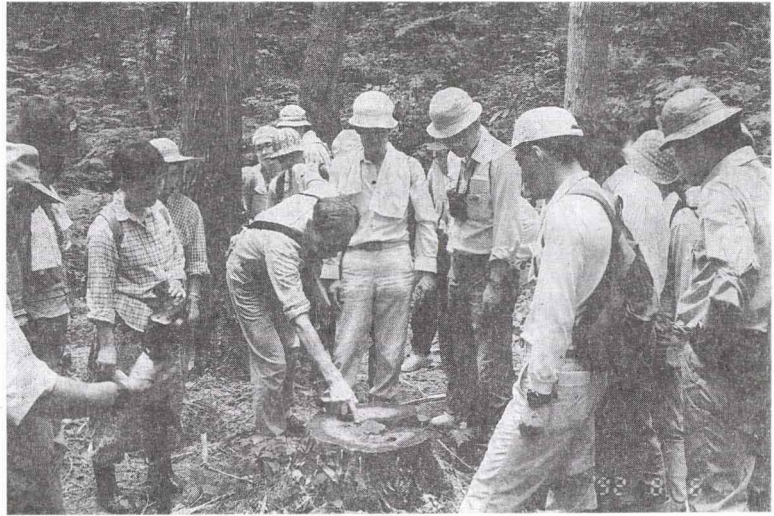
古今東西

酒井 徹朗

山で働く人の作業の強さ

山本 俊明

(農学部附属演習林)



防 災 研 究 所

「都 市 の 防 災」

数理解析研究所

「数 学 入 門」

数理解析研究所では、8月4日(火)から13日(木)までの間(8月8日・9日を除く)午後1時15分から5時まで、数理解析研究所4階大講演室において、公開講座「数学入門」を開催した。

この公開講座は、社会人、中・高校教師、学生等を対象に、専門的題材をわかりやすく解説したものであり、61名が受講した。講義題目、講師は次のとおりであった。

確率論の話題から 楠岡 成雄

「保証書」付き数値計算法 室田 一雄

「時間とマイクロ世界・マクロ世界」

小嶋 泉

グラフと組合せ論 松本 眞

(数理解析研究所)

防災研究所は、8月27日と28日の両日午前9時30分から午後5時まで、大阪市天王寺区の大阪府中小企業文化会館において、京都大学防災研究所公開講座「都市の防災」を開催し、128名が受講した。

この講座は、一般市民を対象として、自然災害の発生とその対策についての基礎的知識から最新の研究成果までを解説するもので、今回はその第3回目として特に都市災害と環境変化を中心に、第1日目は総説と「都市災害の変貌と予測」をテーマに3講義を行い、第2日目は「都市と環境変化」をテーマに3講義を行った。

それぞれの講義題目及び講師は次のとおりであった。

総説 田中 寅夫

都市の災害を斬る

—その変わりゆく姿と望ましい防御方法—

河田 恵昭

都市の洪水氾濫—被害の予測と対策—

中川 一

大規模災害時の避難行動と避難生活

—災害からいかに身を守るか—

室崎 益輝

地球温暖化と都市

—都市が気候に与える効果と受ける影響—

村松 久史

埋立地と地盤沈下—大地が沈む—

嘉門 雅史

全国市町村における防災活動の状況

—防災計画の周知・徹底を怠るな—

今本 博健

(防災研究所)

態、温帯生態、熱帯生態の5研究部門があり、専任教官はあわせて13名である。本センターの設立の経緯や背景については、『京大広報』(No.411)で紹介した。設立後、この一年間は生態学の研究を推進するとともに、全国共同利用施設として機能させる体制作り特に意を用いてきたので、今回はその活動の主なものを紹介する。

1. 共同研究

センターの研究者とセンター外の研究者によって行われる研究で、1991年度の共同研究は28件であった。

2. 協力研究員制度

センターの研究活動を推進するために、学内外の研究者に研究協力者となることを委嘱する制度で、すでに100名を超す研究者が協力研究員となっている。

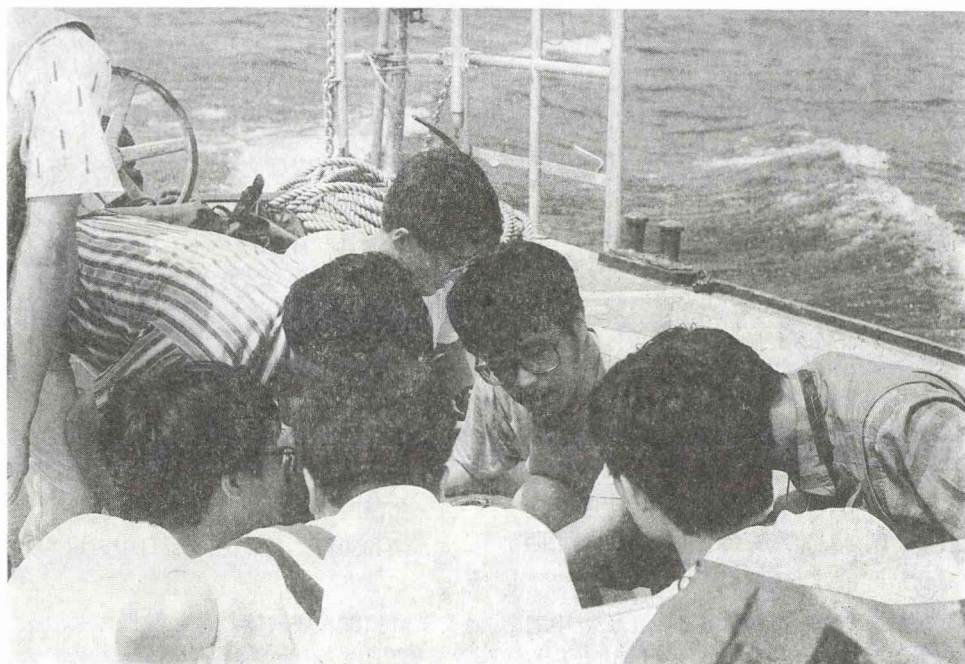
3. 公募研究会

生態学及びその関連分野での重要な研究課題について現状分析を行うと共に、将来の具体的な研究計画を討議し、共同研究を推進する研究体制の確立をめざす研究会で、毎年数件研究計画を公募する。1991年度には(1)琵琶湖の無脊椎動物の固有性と地理変異(代表者 大阪府立大学 谷田一三)、(2)微生物群集の Diversity と特定微生物の動態に関する分子レベルからのアプローチ(代

<紹介>

生態学研究センター

本センターは、生態学の基礎的研究を推進する全国共同利用施設として、1991年4月に設立された。生態学は、生活環境と関連させて生物間の相互作用をとらえることにより、多様な生物の共存機構の解明をめざしている。センターの本館は天津市下阪本の琵琶湖畔(旧天津臨湖実験所)にあり、分室が理学部附属植物園(旧植物生態学研究施設)にある。川那辺浩哉センター長(理学部教授兼任)の下に、生態進化、生態構造、水域生



表者 信州大学 加藤憲二), (3)生きている土とは何か(代表者 京都大学 平井英明)の3件が採用された。

4. 国際シンポジウム

文部省などとの共催で地球環境問題など国際的な討論が必要とされるテーマについて毎年開催する。1991年度には、IGBP 国際シンポジウム「環境変動と生物群集の多様性・弾力性」が、文部省科学研究費補助金重点領域研究「地球共生系」との共催で、1991年12月2日から4日まで京大会館で開かれ、およそ100名が参加した。国外からの講演者は Ashton, Peter S. (Harvard University), Roubik, David W. (Smithsonian Tropical Institute), Appanah, S. (Forest Research Institute Malaysia), Schwemmler, W. (Freie Universität Berlin), Hay, David B. (University of Oxford), Chapin, F. Stuart (University of California, Berkely), Glynn, Peter W. (University of Miami) であった。これに加えて国内から9名が講演を行った。地球環境変動に生態学がどのように取り組むか、国際共同研究をどのように進めるか、またその際に本センターはどのような役割を果たすべきかについて、活発な意見交換がなされた。欧文報告書が近いうちに、海外の出版社から刊行される。

5. 公開講演会

これはセンターの社会教育活動の一環として毎年開かれるものである。1991年度には「生態学と地球環境」を総合テーマとし、次の7課題、(1)自然のバランス、(2)身近な自然保護、(3)生態系の維持、(4)熱帯の生物、(5)物質の生産と循環、(6)動物と植物の関わり、(7)地球環境と生態学の役割、についての講演会が、10月19日から12月7日に、京都と大津で開かれた。7回の講演会には、いずれも50~80名の参加があった。

6. 国際大学院セミナー

国内外の大学院生を対象とした集中セミナーである。第一回目は「地球環境と生態学」をテーマに1992年7月19日から8月24日まで、中国、台湾、韓国の大学院生を主な対象として滋賀県で開かれた。韓国から6名、台湾から1名(研究者)の合計7名と京都大学から10名が参加した。中国からの大学院生は応募者9名中3名が採用された

が、旅券が発給されなかったために参加できなかった。京都大学の大学院生が情報伝達や交流に極めて重要な役割を果たし、大きな成果を挙げることができた。

7. 京都大学生態学研究センターニュース

センターに関する情報や公募などの情報を隔月毎に個人、機関を合わせて、820個所に送付している。

(生態学研究センター)

訃 報

遠藤嘉基 名誉教授

本学名誉教授 遠藤嘉基先生は、6月23日逝去された。享年87。

先生は、昭和5年京都帝国大学文学部を卒業後、大学院を経て、同13年京都帝国大学文学部講師嘱託、同14年文学部助教授に就任、同24年教授に昇任、同41年退官された後、京都大学名誉教授の称号を授与された。

本学退官後は、親和女子大学学長、大谷女子大学、武庫川女子大学、神戸女子大学の教授を歴任された。

先生の専門は、万葉集を中核とする上代語・文学の研究、平安朝文学作品についての、解釈学的観点からの国語学的研究、更には、平安朝平仮名文学の言語と対照的な訓点語とその資料の研究といった国語史学の多方面にわたり、これらの領域において数多くの優れた研究業績をのこされた。主な著書に、『訓点資料と訓点語の研究』、『新講和泉式部物語』、『日本靈異記訓釈攷』等があり、学界に大きな貢献をされた。

これら一連の研究活動、学術上の貢献、更には、国語国字問題・国語教育に尽した功績に対して、昭和50年には勲三等旭日中綬章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(文学部)

森 進 一 経済学部会計掛長

経済学部会計掛長森 進一氏は、7月6日逝去された。享年57。

同氏は昭和32年本学会計課（現経理部）に就職され、以後、霊長類研究所会計掛長、経理部管財課第二管財掛長、経理課支出掛長、第一用度掛長、収入掛長、給与掛長、経済学部会計掛長を歴任、この間35年余りの永きにわたり大学行政、なかでも会計事務に大いに貢献された。昭和62年には京都大学永年勤続者表彰（30年勤続）を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（経済学部）

木 村 毅 一 名誉教授

本学名誉教授 木村毅一先生は、7月8日逝去された。享年88。

先生は、昭和4年3月京都帝国大学理学部物理学を卒業後、同年理学部副手、同5年台北帝国大学理学部助手を経て、同11年理学部講師、同14年助教授、同20年化学研究所教授に昇任、同27年理学部教授、同年化学研究所教授併任、同38年原子炉実験所教授に配置換、同年原子炉実験所長併任、同43年停年により退官、同45年福井工業高等専門学校長に就任、同53年退官された。京都大学及び福井工業高等専門学校名誉教授。

この間、日本学術会議原子核特別委員会委員、同原子力特別委員会委員、日本原子力学会理事、同副会長、関西原子力学会支部長等を歴任し、原子力科学技術の発展に貢献されたほか、大阪府立放射線中央研究所長、日本原子力研究所参与、日本アイソトープ協会顧問、福井県原子力環境安全管理協議会顧問も務められた。

先生の専門は原子核物理学で、日本における同分野の草分けの一人として、原子力科学の開発研

究の面で多くの功績を挙げられた。特に日本で最初のコックロフト・ワルトン型加速器製作に成功され、原子核に関する実験物理等わが国の原子力時代の先駆けとなった。さらに、京都大学原子炉実験所の建設には、設置計画推進の最高責任者となり、設立と同時に初代所長を兼ね、現在の同実験所の礎を築かれた。

一方、広島原子爆弾による災害の調査に大きな役割を果たされた。

これらの研究業績、学術上の貢献、学問を通じての社会的貢献により、昭和49年に勲二等旭日重光章が授与された。

ここに謹んで、哀悼の意を表します。

（原子炉実験所）

玉 井 忠 治 原子炉実験所教授

本学原子炉実験所教授 玉井忠治先生は、8月18日逝去された。享年54。

先生は、昭和36年3月広島大学理学部を卒業、昭和41年3月大阪大学大学院工学研究科博士課程を単位修得退学後、京都大学原子炉実験所助手に採用され、助教授を経て、平成4年8月教授に就任された。

先生の専門は核化学で、特に短寿命核分裂生成物の迅速化学分離・分析に関する研究で数多くの優れた業績をあげられた。発表論文数は100編以上を数え、主な著書として『計測科学ハンドブック』、『放射線技術学演習』等がある。昭和49年には日本原子力学会賞（論文賞）が授与された。

また、先生は本学の学部及び大学院学生のみならず、原子炉実験所の共同利用に來所した他大学の研究者・学生の教育・研究指導に熱心に取組み、多数の優秀な後進を育成された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（原子炉実験所）

日 誌

(1992年6月1日～8月31日)

- 6月3日 霊長類研究所創立25周年記念式典
- 9日 評議会
 ♪ 大学院審議会
- 13日 工学部公開講座「自然と工学の調和」
 (以後、20日、27日、7月4日)
- 17日 創立記念行事(音楽会)
 ♪ 国際交流委員会
 ♪ 国際交流会館委員会
- 18日 創立95周年記念式典
 ♪ 名誉教授懇談会
- 23日 平成4年度京都大学中堅職員研修(第8回)
 (26日まで)
 ♪ 平成4年度京都大学職員実務研修(施設系・第4回)(26日まで)
 ♪ 大学院審議会
- 26日 同和問題委員会
 ♪ イタリア共和国シエナ大学 F. Casprini 教授
 他3名来学, 総長及び関係教官と懇談
- 27日 医療技術短期学部健康科学公開講座「こどもと生きる」(以後、7月4日、11日、18日)
- 30日 評議会
- 7月1日 連合王国オックスフォード大学 E. Brian Smith セント・キャサリンズ・カレッジ学長
 他2名来学, 総長と懇談
- 10日 人文科学研究所夏期公開講座「越境する人びと」(11日まで)
- 11日 農学部公開講座「農業簿記・農業経営講習会」
 (16日まで)
- 14日 平成4年度京都大学技術職員研修(第8回)
 (17日まで)
- 20日 附属図書館商議会
- 22日 環境保全委員会
- 23日 理学部公開講座「高等学校教育関係者のための現代数学展望」(29日まで)
- 27日 学位授与式
- 8月4日 数理解析研究所数学入門公開講座(13日まで)
 ♪ 霊長類研究所公開講座「霊長類の進化」(5日まで)
- 5日 農学部附属演習林公開講座「芦生の自然と森林の利用—演習林への招待—」(以後、6日、7日)
- 27日 防災研究所公開講座「都市の防災」(28日まで)
- 28日 総長, ルイ・パスツール大学及びフランス科学研究庁(CNRS)との学術交流に関する打合せのため, フランス共和国を訪問(9月13日まで)
 ♪ 平成4年度京都大学職員研修語学研修(英語中級コース)第1日(12月15日まで毎週火・金曜日 総60時間)



